

チャンネルトップへ

実質年率8.7%～12.6%
ORIX VIPローンカード

サイボウズがデータベースを作ると、どうなります！

バックナンバー

- 田口ランディ
- M・キーナート
- 茂木 宏子
- 吉村 作治
- 佐保 暢子
- 鈴木 真二
- メール配信サービス

世界の最新情報にアクセス

msn マネー

投資家必見！豊富なデータで気になる銘柄もじっくり研究できる！

テロから1ヶ月—アメリカ人は変わったか？

2001年10月12日
吉田 朱見

ついに空爆が始まった。その日から、グランドセントラルやベン・ステーションを始めとして、市の要所要所には、ナショナルガードが動員され、警官の姿も多く見られる。グランドセントラルに面する通りにはパトカーに並んで戦車のようなものが駐車している。街は通常通りに機能し、朝夕には通勤ラッシュにも見舞われるが、アーミー服のガードと警官の間をぬって通勤するのも、あまり心穏やかなものではない。テロから1ヶ月、ニューヨークで働く日本人の心境は、そして空爆が始まってアメリカ人の心境はどう変わったのか…。ニューヨーク在住日本人ジャーナリストによるレポート。

空爆が始まったその時、多くのアメリカ人達が集まる地方のコンベンション会場にいた。空爆が始まったというニュースを数人が聞き付け、それはすぐに会場全体に広がった。が、騒然という雰囲気はなく、誰もが自分の仕事を続け、また参加者達は催しものを楽しんでいた。確かにこれはみんな予想していたことであり、どちらかというところ「やっと始まったか……」という感じのほろが強かったのである。もちろん、セルラーホンで情報を得ようとする人や車に戻ってラジオを付ける人達などにもいるにはいた。

●とにかくめだつ「怒っている」人

空爆が始まったことに対してどう思うかという質問に対して、コンベンション参加者の1人は、「国のリーダーを信じている。アメリカはピン・ラディン引き渡しに関して、3週間以上の猶予を与えた。それに従わないのであれば、これ以外に方法があるとは思えない」と答えた。彼女、シンシアは、もとアーミー（米国防軍）に所属していたという50歳後半の白人女性で、今は夫とともに自営業を営んでいる。「今でも、もし戦場に行かなければならない状況が生まれれば、私は喜んで行く」という。アメリカに忠誠を誓った生粋のアメリカ人というよりよいだろう。元学校の音楽教師であるという彼女の夫、ピートも同様の意見で、「無実の民間人を、あのような手段で殺すなどもってのほかだ」と、かなりの剣幕だ。とにかく怒っているのである。国内が攻撃され、同国民が殺された。同じ中東を攻撃するといっても、湾岸戦争の時とはわけが違う。

もっとパーソナルな感情が根底にあるのだ。彼はさらに続けた。「日本人に聞きたい！もし、自分の国で同じようなことが起こったら、君たちはどうするんだ？」と。

象徴的なビル2つが想像もできなかったような手段で失われ、多くの命を奪ったこのテロは、ニューヨーカーにとってももちろん衝撃的なものであったことは間違いないが、ニューヨーカーはもともとタフで知られる人たちだ。ピートは、「これが起こったのがニューヨーク以外の地だったら、人々の精神的回復はニューヨーカーのように早くはなかっただろう」とも付け加えた。これはもちろんニューヨーカーが冷たい人間の寄り集まりといっているのではない。ニューヨーカーの強さへの多大なる賛辞なのである。

コンベンション会場に集まった人々は、中年層から高齢層が主で、胸に手を当て星条旗を見上げてきた人達がほとんどである。他の人々の意見も大かれ少なかれ、似たような好戦ムードのものであった。ただ、自分達のビジネスを営む人達も多く、今後の経済の行方に対して憂いを示す人も少なくはなかった。ただ、それは「テロリストがとんでもないことをやらすから、経済がダメになりそうで、我々のビジネスも後先、危ないじゃないか！」と、やはり怒っているのである。

なかには当然、反戦を唱える人達もいただろう。

が、「いや、武力は解決になりませんよ……」と言いつける雰囲気ではなかったようだ。

●アメリカだけは大丈夫、は消える

この事態でアメリカ人達の人生に対するフィロソフィーは変わるのだろうか？

サウスイースタン・ルイジアナ大学のソーシャルサイエンス・リサーチセンターのラッセル・カストロ氏（Russel A. Castro）は、「初めて、アメリカ人は自分たちの国が、この世界の一つであることに気付いたであろう」と、前置きする。

つまり、今までアメリカ人はアメリカが世界の中心で、下々の世界とは別のところにいると信じていたのだ。

過去、ヨーロッパやアジア、その他多くの国で起こっていた反社会的な恐怖に、自分達もさらされることになるろうとは、夢にも思っていなかった。しかし今回のことで、やっと身を持ってそれに気付いたというのである。

今まで孤立的な平和主義であったアメリカ人たちの意識は、今、軍隊的な好戦ムードに変化している。しかし同氏は基本的にはこの変化も一時的なものであると推測する。こうしたテロが立て続けに起こるのでない限り、現在無理にでもそうしているように日常生活を続け、そしてやがては事件前と同じような意識に戻っていくであろうというのが、同氏の意見である。

最近、街角でとみに目につくのが、ガードと警官、そして宗教関係のちらしを配る人々だ。なかには「世界の終わりが来るから祈りましょう」的なうさん臭いものもある。

確かに宗教関係への勧誘（ちらしを配るだけなら勧誘とは呼ばないかもしれないが……）が増えているようだが、これで信心深くなる人が増えるとは思えない。カストロ氏も、この事件により、宗教に頼る人口が増加するとは考えていないようだ。

「宗教心はあるのだが定期的に教会などに通っていない人達は、これをきっかけとして、もっと頻繁（ひんぱん）に教会に行くなど、以前よりも宗教的な儀式に参加することが多くなる可能性は高い。だが、今までさほど宗教に関心を示さなかった人達が、この事件を境にしていきなり信心深くなるとは考えにくい」としている。

これには、マスキング大学の社会学教授、ステーブン・マックガイアー（Steven J. McGuire）氏も同じ見解を示している。

現在、ニューヨークの市長ジュリアーニ氏や、ガバナー、パターキー氏の事態への対処に対しては、多くのニューヨーカーが大いなる好感をいただいており、ブッシュ大統領に対しても大変好意的なムードだ。全体的には、アメリカ人たちがこの事件によって国に対する信頼を失ったということはないと考えてよいだろう。

ニューヨークで精神科医を勤め、ニューヨーク総領事館の顧問も担う齊藤医師は、「ニューヨークはもとより、大都市の人々は不安を強めただろう。今回のことで、安全性に対する疑問視はあるだろうが、しかしこれは生命に対する危険への不安感であって、国に対する不信感ではない」と語る。

雑多な人種が暮らすアメリカでは、「アメリカ人」とひとまとめでして考えるのは少々難しいが、今は全体が一種のハイ状態といってもいいかもしれない。「危機が来て、一致団結！」というのが、アメリカ人のメンタリティーではないだろうか。しかし同医師は「この不安状態が長引けば、戦争や軍事に対する反対意見も強くなり、悪い経済状況も手伝って、いろいろな不満が吹き出してくるだろう」と推測する。そうした不満が続けば、それを取り除いてくれない国への不信感へつながっていく可能性は十分に考えられる。

●意外に変わらない日本人のアメリカ観

今回のテロではオフィスを失った日系企業も数多い。仮オフィスを借りたり、別会社へ間借りするなどして急場を凌ぎ、徐々に業務を通常に戻していること懸命に努力している。受けた精神的ショックは生半かなものではなかったはずだが、それでも必死に立ち直ろうとする姿は、タフと言われるニューヨーカーにも勝るかもしれない。

「テロ直後よりは少し落ち着いてきているようですね」と語る齊藤医師は、このテロ事件以来、日本人達の心のケアに努めてきた。それを目的とした日本人向けのホットラインなども開設されているが、同医師は、予想に反して、それらを利用する日本人の数が少なかったことに少々驚いているという。これは、日本人が精神の専門家を利用することに慣れていないことも原因しているかもしれない。潜在的なニーズは高いと思われるのだが……。

日本人のアメリカという国に対する反応はどうだろう。

同医師が接する日本人の中では、アメリカへの不信感を口にしている人は1人もいないそうだ。ばく然とした不安があるにしても、それがアメリカへの不信感にはなっていない。それよりも、周囲では日本政府へネガティブな反応を示す人のほうが多いようである。危機管理が整っていない、アメリカのように決断が速くない、といったことが主な理由である。また、アメリカにいる日本人より、日本にいるそうした人々の家族の方がけっこう神経質になっているケースもある。被害に遭った人々の中ですら、「アメリカが好きだからこちらに残りたい」という意見を持つ人が多いのはどういうわけだろうか。（事件があったから）日本に帰りたいという人にはまだ1人も会っていない。

このように日本人のアメリカ観は今のところ、あまり変わってはいないようだ。人生観に関しては一言では語れないだろうが、齊藤医師は、「この事件にどのレベルで関わったかによっても異なるが、セキュアなものがなくなったことだけは確かでしょう」という。

事件へは様々な人達がいろいろな関わり方をしている。例えば、テロ時にたまたまある人から用事を頼まれていたために、逃げ遅れそうになった人としてよう。

それで用事を言い付けた人に対する怒りを募らせるケースもある。反対に、上司の指示に従って避難したが、残った上司が被害に遭ったという人は、罪の意識に苛まれる。

「人生観とまでおおげさには言えないかもしれないが、まず、『人』に対する見方というのは変わるでしょうね」と、同医師は締めくくった。

状況は日々変化している。一方、街では人々がいつもの電車で、いつものオフィスに通う普段通りの生活が続けられている。しかし、それぞれの心の中で何かが変わったことだけは確かだ。個々の中で起きた変化が、よい方向に向かう変化であることを祈りたい。